

発見!

たからモノ ただみの文化遺産

第12回

児童文学者 山内秋生

しらゆき
「白雪は銀の砂」「銀色の光を残す」峠の雪



やまのうちあき お
山内秋生（1890・明治23～1965・昭和40）は只見町の二軒在家に生まれた児童文学者です。大倉の良林公園に、「故郷よ 山川よ つばめ来るころよ」と刻まれた文学碑が建てられています。本名は山内千代吉ですが、児童文学者としては山内秋生（秋生）と名のりしました。



▲山内秋生の肖像（1925年ごろ）

近代児童文学は、明治時代中期の1890年代は、作家巖谷小波（1870～1933）の『こがね丸』に代表される教訓説話的な「おとぎばなし」の時代でした。そのころ、山内秋生は小林尋常高等小学校を卒業し、巖谷小波が編集する児童文学雑誌の『少年世界』を愛読していました。その縁をたよりに、小波に手紙を出すと入門が許され、上京して小波の書生として住み込み、中学校に通いました。その後、秋生は小説や子ども向けの作品を発表しました。

秋生は、1912年（大正元）に日本初の児童文学団体「少年文学研究会」を始め、1922年の「日本童話協会」、1926年の「童話作家協会」の設立に参画しました。大正時代の児童文学は、「童話」と呼ばれ、芸術性豊かな童話と童謡の児童雑誌『赤い鳥』が創刊されました。秋生の童話は、小波門下の教訓的な雰囲気を残し、『赤い鳥』への発表はありません。

その一方で秋生は、「明治大正の童話界」（1927年）、「日本童話史—明治・大正時代—」（1932年）の論文や、『日本文学大事典』（1932年）「少年文学」を執筆し、『小川未明童話全集』（1950年）を編集しています。現在では、秋生は童話作家よりは近代児童文学の研究者、評論家、編集者としての業績が評価されています。

秋生の初の童話集『蛭のお宮』（1925年・大正14）を読んでみましょう。

「ある山の麓に、大きなお池がございました。……寂しい秋がすんで、寒い冬が来たら、お池の上には水晶のような氷が張るだろう。その時降り積る白雪は、銀の砂のようにかたまるだろう。」

（「赤い花の咲く池」）



▲『蛭のお宮』

「静子の生れたところは、北国の山奥でありました。……今年もまた春がきました。三月も四月の間降り積った雪が、皮をぺろぺろとはぐように、一日々々消えて行って、珍らしくあらわれた地べたには、可愛い片栗の花が咲きました。たんぱぽが咲く、げんげが咲く。こうして、雪は野からふもとへ、ふもとから山へとだんだん追いつめられて、ようやく北の峠のいただきに銀色の光を残すだけになったころは、野も山もただ一面の花になっていました。」

（「夜明けの星」）

秋生はふるさとの雪と早春の景色を心に浮かべて書いたのでしょうか。只見の美しい自然と風土が、児童文学者山内秋生を生みました。只見は童話のふるさとなのです。来年は没後60年になります。



▲『春の野のゆめ』



▲『父のふるさと』



▲『月夜のなげき』

文：久野俊彦
写真：原永円香



ただみ・モノとくらしのミュージアム 展示情報



第2回テーマ展「身につける民具」

会期：2024年2月6日（火）～2024年6月16日（日）

場所：ただみ・モノとくらしのミュージアム 展示ホール

入館無料